

# 兵士・勉の自然観

## 文人の武蔵野

大岡昇平が小説「武蔵野夫人」の主人公とした「勉」は、南方の戦地から帰還して「はげ」を訪れました。前回の記事で紹介しましたが、ここの「はげ」とは「一つの窪地」であり、鳥や蝶の路でした。

復員した勉は久しぶりに「はげ」を訪問し、「古い武蔵野の道」の「黒い土」を「熱

### 大岡昇平 ⑦



「はげの小路」には小さな水路が流れている（小金井市で）

帯から帰って懐かしく思った唯一のもの」だと感じます。ただし、登場人物が殺伐とした戦地から帰還し、故郷の自然に癒やされると捉えるのは正確ではありません。敗戦と俘虜生活を経て「彼

は人間に絶望していたが、自然は愛していた」とあるように、自然を愛していましたが、その「自然」は平和主義的な花鳥風月を旨とするものではありません。戦地で接した自然であり戦前戦後に武蔵野で接した自然であります。

次の場面に描かれている勉の「感覚」は、高校生だった大岡が小金井に引っ越した友人の家に遊びに行っていた頃、雑木林だった一帯（現在の国際基督教大学があるあたり）に歩み入ったときの「実感」でもあるそうです。

「出征する前『はげ』を訪れて歩いた時、この辺は一帯の雑木林で檜やヌルデが美しく紅葉していた。その中へどこまでも入って行くと、舟で漕ぎ出し沖へ出るような感覚を味わったのを勉は憶えている。林は戦争中の薪の不足と、附近に飛行場を新設する用材として切り払われたのである。」

大岡も雑木林に歩み入り「舟で漕ぎ出し沖へ出るような感覚」を味わい、まるで海に出て水平線に向かっていくような開放感を感じたのでしよう。大岡自身は戦争により

故郷の風景が一変したことを残念に思ったかもしれない。しかし、作中で勉が伐採を嘆く描写はなく、人間の必要性のために植栽された雑木林が人間の必要性のために伐採されたことが確認されるのみです。

兵士として自然を愛する場合、戦争が自然を壊すことが人間への絶望にはつながったとしても、そこに感傷が生じる余地はないのでしよう。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。